

佐賀大学の英語教育充実に向けたICTを活用した学習環境整備の研究

穂屋下 茂^{1,5}、早瀬 博範²、Alan Bowman¹、久家 淳子³、福崎 優子³、藤井 俊子⁴

The Improvement of the English Learning Environment through ICT at Saga University

Shigeru HOYASHITA^{1,5}, Hironori HAYASE², Alan Bowman¹
Junko KUGE³, Yuko FUKUZAKI³, Toshiko FUJII⁴

要 旨

本学では、2013年度入学の学生から、全学統一英語能力テストとして1年次前期と2年次後期にTOEIC-IPテストの受験を課している。1年次前期のスコアは能力別クラス編成に利用し、2年次後期のスコアは英語の成績評価の30%として用いる。このようなTOEIC-IPテストの全学的導入と活用を受けて、英語学習支援のためのeラーニング教材として、e-TOEICとPre-TOEICを開発した。e-TOEICは、TOEICテストに向けた英語力強化のために授業とリンクさせ活用し、Pre-TOEICは、TOEICの模擬試験として、希望者に無料で実施するなど、本学の英語学習環境の整備に繋がっている。これらは、すべて8大学連携事業のひとつと位置づけて推進している。本稿では、e-TOEICやPre-TOEIC等の試みについて検証する。

【キーワード】 グローバル人材、英語能力、全学統一英語能力テスト、TOEIC、学習支援

1. はじめに

昨今、大学卒業生は世界で活躍できるグローバル人材であることが求められている。グローバル人材とは、対人コミュニケーション能力に優れ世界的に活躍できる人材である。専門知識のみならずそれを支える基礎科目の知識が充実し、社会人として不可欠な知識、態度、技能等の学士力の確保が求められる。英語能力は、それを活かすた

めの基本ツールである。著者らはこれまでも学生の英語能力を向上させる様々な試み⁽¹⁾⁻⁽³⁾を行ってきたが、大学全体の取り組みには至らなかった。

「大学で英語をきちんと勉強させて、学生の学力を十分に育成していない」という卒業生や高校の校長等の指摘を受けて、本学では2013年度入学生より、全学統一英語能力テスト⁽⁴⁾を実施して、受験を義務化することにした。さらに教養課程の約8割を英語のネイティブによる授業で履修する「留学支援英語教育カリキュラム⁽⁵⁾」もグ

1 全学教育機構
2 文化教育学部
3 eラーニングスタジオ
4 全学教育機構 (非常勤講師)
5 責任著者

ローバル人材強化に向け新設した。

そのような本学の動きと時を同じくして、2012年8月にスタートした大学間連携共同教育推進事業(参照文献(7),付録参照)で、プレイスメントテストと到達度テストの実施により、学生に自分の基礎学力を確認・振り返りを行わせ、さらに学力が満たない学生にはeラーニングシステムを用いた主体的な学びの場を提供して、卒業時のアウトカムを保証する試みを実施されることになった。

2. 英語能力の測定と学習支援

2.1 全学統一英語能力テスト実施

本学では、2013年度入学生から全学統一英語能力テストの実施を決定し、全学統一英語能力テストとしてTOEIC-IPを利用することにした。これまで、大学に入学したものの、英語能力が向上するどころか、むしろ低下したまま卒業し、志望通りに就職できない学生が多い。また就職したものの英語能力が低く、グローバル社会で活躍できないという声も大きくなってきている。大学の学びは高校の学びと異なり、自己管理しながら自主的に学習することである。英語能力が低いのは、大学で十分な学習時間を確保して英語の勉強をしなかったに過ぎないが、昨今、大学の教育体制が問われる時代に変貌している。

入学して自分の英語能力を把握し、それに基づいて学生時代にどのように勉強していけばよいかを計画し、実行し、さらに評価、改善する機会を与えるために、全学統一英語能力テストは重要である。英語能力を向上させるためには、英語能力を逐次測

定し、その結果に基づいて英語学習時間を十分に確保するタイムマネジメント能力が必要である。

本学では、1、2年次に英語A、B、C、Dが必修科目として開講される。入学後2ヶ月経った頃に第1回目の全学統一英語能力テストを受け、その結果に基づいて、英語B、C、Dは習熟度別にクラス編成される。TOEICのスコアに基づいて、初級クラス、中級クラス、中上級クラスに分けて英語の授業を受けさせることにした。

2回目の全学統一英語能力テストは、2年次後期に実施される。英語Dの評価では、このテスト結果が表1に示すように30% (30点満点) を占め、対面授業は70% (70点満点) である。英語の苦手な学生にとって、かなり努力しないと卒業できない可能性がある。

表1 英語DにおけるTOEIC試験の点数による30%分の評価方法

TOEICの得点	30%分として反映される点数(30点満点)
505以上	30
455 - 500	25
405 - 450	20
355 - 400	15
305 - 350	10
250 - 300	5

習熟度別クラス編成にすると、上位のクラスの学生はより成績が向上するが、下位のクラスはよりできなくなる傾向がある。そのために教員の労力を極度に増やさずに、2年の後学期にTOEICスコアが500点以上を目標に自学自習できるeラーニングシス

テムが必要である。

なお、全学統一英語能力テスト（TOEIC-IP）の結果は佐賀大学ホームページに公開している⁽⁴⁾。2013年度入学生に対する受験率は99.0%（1,342名／1,355名）、2014年度入学生に対する受験率は98.8%（1,343名／1,360名）であった。表2は2013年度と2014年度入学生の全学統一英語能力テスト（TOEIC-IP）の受験者数と平均点である。平均点はほとんど同じである。TOEIC公式HP⁽⁶⁾によると、企業が求めるTOEICスコアは、新入社員には565点、海外出張での海外赴任者には670点超とのことである。

表2 全学統一英語能力テスト（TOEIC-IP）の受験者数と平均点

	2013年度入学生		2014年度入学生	
	受験者数	平均点	受験者数	平均点
大学全体	1342	389	1343	388
文化教育学部	254	384	251	386
経済学部	265	389	270	378
医学部	116	492	166	493
理工学部	504	344	500	343
農学部	153	433	156	441

2014年度に入学した全学部（医学部を除く）の学生のTOEIC-IPのスコアは、565点以下は約97%を占めた。TOEIC公式HPの4年生大学の大学生の公開データ（平均値スコア）を見てみると、2012年度は平均スコア555（298,397名）、2013年度は平均スコア423（211,169名）である。このスコアは学生の英語学習の目標になる。本学の学生のアウトカムの質を向上させるために、このスコアの開きをどのように埋めるか、根本的な対策が必要であることは明白である。

2.2 プレイスメントテストと到達度テスト

少子化に伴い、基礎科目の学力の低い学生も入学してくるようになった。大学は入学を許可したからには、大学が定めた学力を身につけさせて社会に送り出さなければならない。2012年度に採択された大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」⁽⁷⁾では、英語、日本語、数学、情報の基礎科目を、社会人基礎力のレベルに達成させるべく、「プレイスメントテスト」「到達度テスト」を作成して、学士力や就業力を身につけさせる試みを8大学間で共同して継続して実施することになった。さらに、プレイスメントテストで基礎科目の学力の低い学生には、eラーニング学習教材で自主的に学習させ、社会が期待する学力が身に付くようにするシステムを構築することになった。この大学間連携共同教育推進事業で、本学は英語WGの主幹校を務めている。

プレイスメントテストや到達度テストにより主体的学びの場の確保するためのスケジュール例を図1に示す。プレイスメン

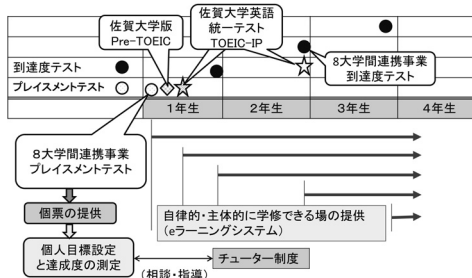


図1 プレイスメントテスト&到達度テスト及び主体的学びの場の確保

【2014プレースメントテスト】

大学名: _____ 学部: _____ 学科: _____ 学籍番号: _____ 氏名: _____

《あなたの科目別基礎力》

項目	日本語	数学	情報	英語リーディング	英語ライティング
得点	84 / 100	82 / 100	78 / 100	80 / 100	50 / 100
学内平均	62.5	55.9	66.7	67.6	43.2
学内順位	2 / 96	6 / 88	23 / 95	20 / 97	22 / 94

日本語

項目	点数
漢字	23 / 29
読解	39 / 43
文法・敬語	11 / 14
短文読解	11 / 14

数学 (文系)

項目	点数
高校1年学習分野	82 / 100
高校2年学習分野	/
高校3年学習分野	/

情報

項目	点数
情報活用の実践力	250 / 325
情報の科学的な理解	275 / 375
情報社会に寄与する態度	250 / 300

英語

項目	点数
単語	60 / 30
イディオム	20 / 30
文法	30 / 30
内容理解	10 / 10
リスニング	80 / 100

《あなたが見た自分の学び》

項目	あなたの得点	学内平均
考えよとする意図の濃さ	85	67.0 / 100
行動しよとする意図の濃さ	85	70.7 / 100
周りの評価を気にする意図の濃さ	85	65.6 / 100

あなたの結果 ----- 学内平均

① 学習意欲
② 学習志向
③ 学習意欲
④ 学習意欲
⑤ 学習意欲
⑥ 学習意欲

⑦ 失敗に対する承認
⑧ 失敗に対する承認
⑨ 失敗に対する承認
⑩ 失敗に対する承認

⑪ 立ち直る力
⑫ 立ち直る力
⑬ 立ち直る力
⑭ 立ち直る力

⑮ 用語の説明
⑯ 用語の説明
⑰ 用語の説明
⑱ 用語の説明

図2 個票のサンプル

60問
度数分布(英語)

点数	人数
0点	1
1-10点	4
11-20点	79
21-30点	337
31-40点	366
41-50点	331
51-60点	312
61-70点	256
71-80点	171
81-90点	52
91-100点	8
合計	1917

受験者数 1917
標準偏差 18.0
100点満点換算平均点 47.3

正解率

受験者数	1,917名
Q21	29.0
Q22	60.4
Q23	21.5
Q24	48.9
Q25	46.3
Q26	47.5
Q27	52.9
Q28	57.6
Q29	51.7
Q30	59.3
Q31	46.7
Q32	38.7
Q33	41.1
Q34	55.5
Q35	52.9
Q36	75.4
Q37	61.7
Q38	59.4

問題別解答分布

	1	2	3	4	正解	50%	逆転
Q21	55.9	11.7	29.0	2.6	3	×	×
Q22	12.1	60.4	10.4	16.6	2	○	○
Q23	22.1	13.5	42.5	21.5	4	×	×
Q24	48.9	21.8	14.7	14.1	1	×	○
Q25	15.9	46.3	5.0	32.4	2	×	○
Q26	10.7	37.5	47.5	3.7	3	×	○
Q27	9.7	52.9	13.0	23.8	2	○	○
Q28	7.4	57.6	12.1	22.4	2	○	○
Q29	20.9	51.7	14.8	12.3	2	○	○
Q30	23.0	8.6	8.4	59.3	4	○	○
Q31	17.1	13.6	21.9	46.7	4	×	○
Q32	38.7	21.2	14.0	25.0	1	×	○
Q33	25.5	19.9	41.1	12.6	3	×	○
Q34	18.3	55.5	14.6	10.8	2	○	○
Q35	52.9	16.0	15.5	14.7	1	○	○
Q36	15.8	75.4	6.1	2.1	2	○	○
Q37	61.7	11.1	17.7	8.8	1	○	○
Q38	8.4	18.6	59.4	12.7	3	○	○

(人数) 得点分布(英語)
60問 n=1917

図3 英語プレースメントテスト得点分布と検証(2012年度試行)

トテストや到達度テストの結果は図2の例のような個票を返すことにしている。個票は、個人の得点の他、学内平均点、学内順位などを記述し、さらに各科目に対するコメント（現状と学習アドバイス等）を自動的に作成するようにした。また、個票には、アンケートに基づく学修観の結果も記載して、学習のタイムマネジメントに役立てられるようにしている。

プレイズメントテストや到達度テストは、得点分布等を検証して、多くの受験者に対してより得点分布が正規分布に近づくように問題の難易度を調整した。2012年度の試行段階の英語プレイズメントテスト得点分布と検証例を図3に示す。

2.3 Pre-TOEIC

TOEICの試験時間は120分で、リーディング100問、リスニング100問と問題数も多く、時間も長い試験である。TOEICのスコアをアップさせるには、何度も受けて、慣れることも必要である。Pre-TOEICは、TOEIC対策として本学独自で作成した模擬テストである。試験時間が長いと学力測定テストとして、多くの学科等で採用してもらえないことも考えて、また大学間連携共同教育推進事業の一つの事業として、ハーフバージョンも作成した。ハーフバージョンはTOEIC-IPの半分の時間でできるように、リーディング45問で35分、リスニング45問で25分、合計60分とした。

3. 自学学習環境の構築

3.1 e-TOEICコースによる授業外学習の確保

e-TOEICは、本学の学生は誰でも主体的学びの場として授業外に利用可能なシステムである。このシステムを利用して、実験的に英語能力の低い学生への対策として、強制的に学習させる試みを行った。英語Bで初級クラスに振り分けられた学生に対し、英語能力を強化するために、eラーニングで学習する「e-TOEICコース」での自学学習を義務付けることにした。この自学学習は、指定された期間内に決められた範囲の履修要件を満たさなければ、英語Bの授業を受けても、英語Bの単位が取得できない決まりにした。翌年再履修となった際にも受講が義務付けられるので、決められた通りに学習しないと単位は取得できず卒業できないことになる。

e-TOEICコースでは、与えられた範囲の学習進捗状況はeラーニングスタジオのスタッフにより、逐次確認され、学習進捗状況をまとめて英語担当教員にフィードバックしている。eラーニングは、だれでも、どこでも、何度でも学習できると同時に、常に進捗状況を担当教員が把握できる。e-TOEICコースの教材には、A社のNetAcademy2⁽⁸⁾を利用し、その中のスーパースタンダードコースとパワーワーズコースの2つのコースを使用した。どちらのコースも決められた期日までに各レベル診断テストを受験し、自分の現在の能力を確認し、学習範囲を把握して学習計画をたて、学習期日を厳守しながら自学学習を進めていかなければならない。

e-TOEICコースの実施支援体制を図4に示す。LMSはA社のLMSだけでは、本学の自由な支援体制ができなかったため、本学がよく利用しているオープンソースのMoodle⁽⁹⁾も併用した学習支援システムにした。

パワーワーズコースは、Level 1～12まであり、各レベル1,000語学習できるようになっている。様々な単語の意味・スペルを効率的に学習し、語彙力を高めることができる。スーパースタンドコースでは、リーディング（診断8レベル）とリスニング（診断5レベル）それぞれの能力を伸ばすために効率的に学習できるようになっている。英語Bの初級クラスの学生は、コースのレベル診断テストの結果に基づいて、学習範囲が決まる。個人差はあるが、ちなみに学習時間は約20時間必要である。

英語は、なるべく多くの語彙力を身に付け、総合的にリーディングとリスニングの力をつけていく学習を継続することで、TOEICのスコアは上がり、ひいては総合的な英語能力も向上する。英語Bの初級クラスでe-TOEICで学習が義務付けられた者は、取得要件をしっかりと確認の上学習を進めていくのはもとより、なにより自分のスキルアップのための教材として学習していくことが期待される。

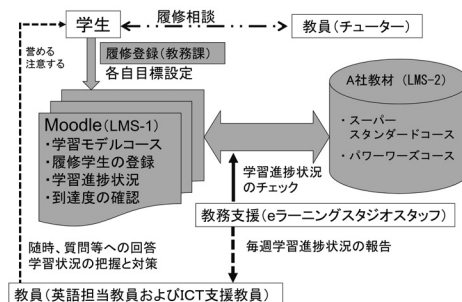


図4 e-TOEICコースの実施体制
全学統一英語能力テスト (TOEIC-IP) の結果、
点の低い学生対象に実施 (必修)

3.2 M社のTOEIC対応テキストPRISMシリーズ

前節で述べたA社の教材で学習するe-TOEICシステムは、システムと教材導入費用負担が大きいので、どの大学でも容易に適用できない。そこで大学間連携共同教育推進事業の一環として、大学の費用負担がほとんどない、学習支援システムと教材を整備することにした。

M社のTOEIC対応テキストPRISMシリーズ⁽¹⁰⁾に基づく英語eラーニング教材の概略を表3に示す。科目としては6コースあり、red/rose/violet (初級)、indigo/blue/green (中・上級) で構成されている。各コースは、教科書コンテンツ (リーディング、

表3 TOEICスコアを伸ばすためのPRISMシリーズ英語教材

	目指すスコア*	教科書の習得単語	小テスト	文法問題	到達度テスト	1章当たりの学習時間
Red (レベル1)	300-350	150-200	3問×15章	2問×15章	60問×1回	90分～120分
Rose (レベル2)	350-400	180-250	3問×15章	2問×15章	60問×1回	90分～120分
Violet (レベル3)	400-450	200-300	3問×15章	2問×15章	60問×1回	90分～120分
Indigo (レベル4)	450-500	250-350	5問×15章	2問×15章	60問×1回	90分～120分
Blue (レベル5)	500-550	300-400	5問×15章		60問×1回	90分～120分
Green (レベル6)	550-600	350-450	5問×15章		60問×1回	90分～120分

*ルーブリックに合わせた独自基準、ルーブリックシート参照

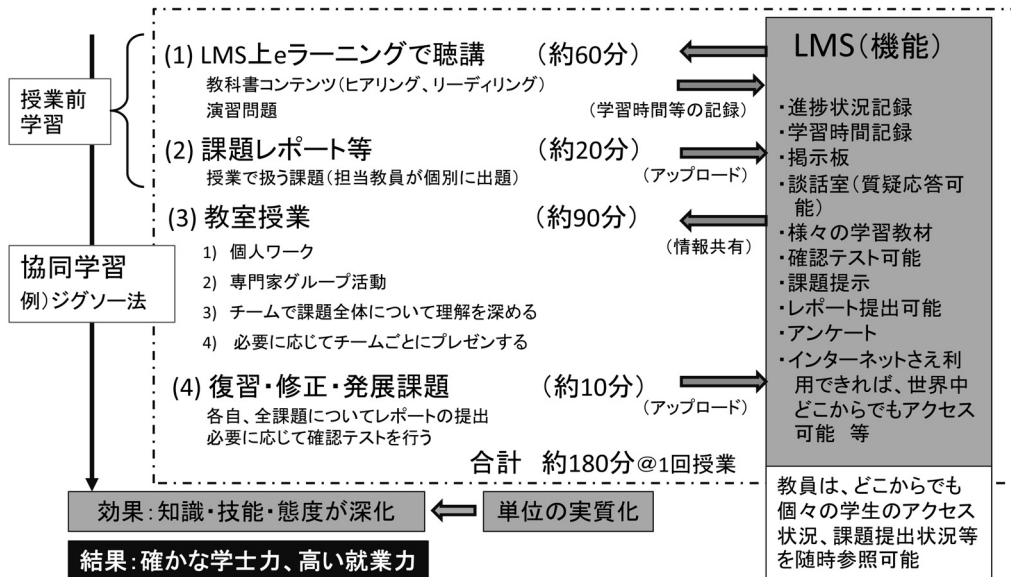


図5 反転学習を導入したときの学修時間の例 (1科目1単位の授業の場合: 15回授業)

リスニング)、小テスト、文法問題等で構成され、各コースには到達度テストも大学間連携共同教育推進事業として整備した。なお、教材のeラーニング化は佐賀大学で受け持った。図や写真に関しては、本学のeラーニングスタジオでデジタル表現技術者養成プログラム⁽¹¹⁾の学生に協力してもらった。eラーニング教材として大学間連携共同教育推進事業の協定校の8大学の学生であれば誰でも使用可能であるが、M社は教材素材(音声やテキスト等のデジタルデータ)を無償で提供しており、学習する際には教科書の購入が必要という条件で進めているので使用上注意が必要である。

このような教科書・英語教材を使うと、eラーニング教材を新たに作成する必要がないので、図5に示すような反転授業(学習)を容易に遂行することも可能になる。自学学習時間も十分確保できるので、英語

能力を確実に向上させることが可能になる。反転授業は、伝統的な授業スタイルと異なり、自宅で動画等による講義を受けて大方の知識を習得し、大学の教室では修得した知識やスキルを基に議論し合い、発展的な課題に取り組み、知識をより深化させることができる。対面授業のやり方によっては英語によるコミュニケーションの機会も増やせるので、グローバル人材育成に適している授業形態と言える。

3.3 その他

TOEICの対策や自学学習への取り組みとして、本学では他にもeラーニング教材を提供している。スーパースタンドコースのTOEIC模擬試験、“Reading Preparation Course for the TOEIC Test”⁽³⁾をeラーニング化している。

4. 結果と考察

4.1 e-TOEICコースによる学習効果について

2013年度、TOEIC-IPで英語B初級クラスに振り分けられた学生は255名である。e-TOEICコースとして、パワーワーズコースの指定レベルを進捗率100%、リーディングの指定レベルで学習時間5時間以上、リスニングの指定レベル学習時間5時間以上を指定された期間中に達成されなければならないように決めた。各指定レベルは、それぞれの診断テストで決められる。

2013年度の診断テストにおける結果を表4に示す。特に語彙力に関しては、大学の英語の授業についていけるかどうか不安な数字であった。企業が新入社員に求めるTOEICスコア該当は5～6レベルである。10月～12月中旬でe-TOEICコースで学習して、2013年度は255名の内、18名が不合格(10名は完全放棄)となった。

英語B初級クラスの学生にアンケートを実施したところ206名から回答があった。その中で「授業以外に英語を学習すべきだと思っているか」聞いた結果を図6に示す。「いいえ」と回答した学生が20%近くいて、その大半が「必要を感じない」と回答したことは、社会がグローバル化している実情を十分に説明できていない大学の教育体制が問題でもあるといえるだろう。

表4 レベル診断テスト (2013年度)

レベル	(人)					未受験者
	1	2	3	4	5以上	
語彙力	204	27	13	2	2	7
リーディング	205	21	21	2	0	5
リスニング	3	70	175	2	0	5

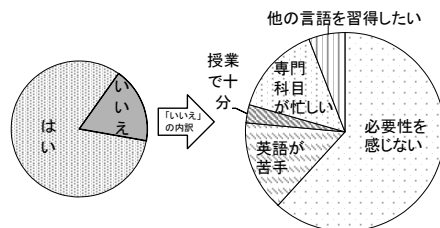


図6 授業以外に英語を学習すべきだと思っているか (2013年度、206名回答)

表5 Pre-TOEICの受験者数

	2013年度	2014年度	
	HALF(人)	HALF(人)	フル(人)
受験申込者	137	88	57
受験者	103	62	39
事前キャンセル	6	6	1
当日欠席	28	20	17
問題用紙書き込み	28	10	9

4.2 Pre-TOEICの結果

Pre-TOEICは、本学の教員で開発したTOEIC-IPに準拠したテストである。無料で何度でも実施でき、希望する学生はTOEIC-IPを受験する前に、TOEIC-IPとはどのようなものか確認することもできる。フルバージョンと時間を短縮したハーフバージョンを開発し、2013年度には、ハーフバージョンのみ実施した。しかし、フルバージョンを望む声が多かったので、2014年度にはハーフバージョンとフルバージョンを実施した。Pre-TOEICの受験者数を表5に示す。フルバージョンの受験者が多かった。

受験者にアンケートを採ったところ、143名(2013年と2014年の合計)から回答があった。図7はPre-TOEICの受験理由を示す。「無料だったから」という面もあったが、「どのようなものか知りたい」「本番に向け

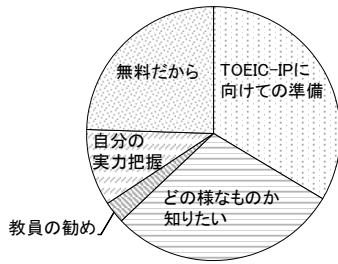


図7 佐賀大学版Pre-TOEICの受験理由

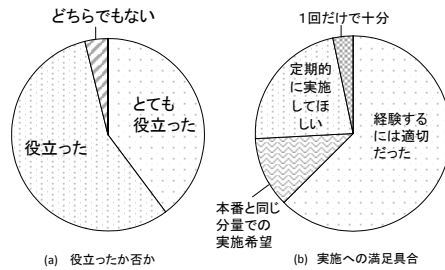
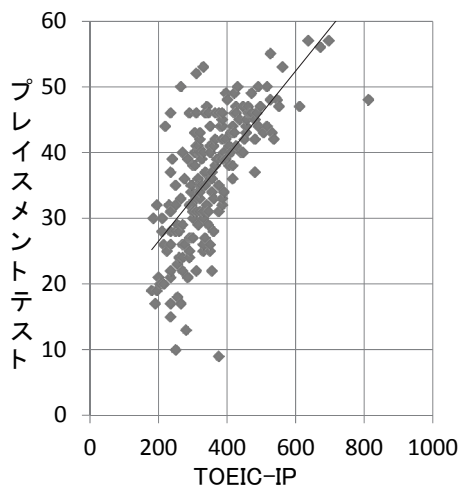
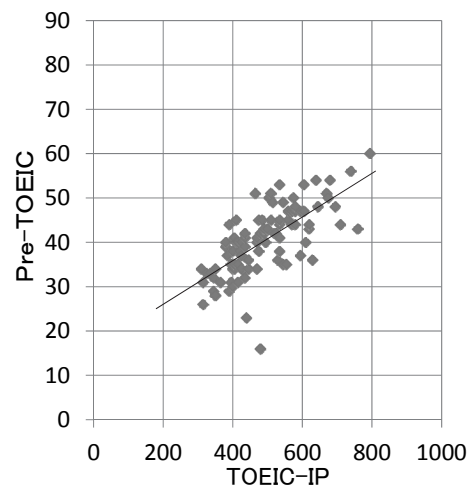


図8 Pre-TOEIC受験後の感想 (2013年度)



(a) TOEIC-IPとプレイズメントテスト
(寄与率 $R^2=0.4602$)



(b) TOEIC-IPとPre-TOEIC
(寄与率 $R^2=0.4867$)

図9 3つのテストの相関 (2013年度)

での指標にしたい」「本番の準備」「自分の実力を知りたい」という意見が多かった。意外にも「教員に勧められたから」というのは少なかった。

2013年度のPre-TOEIC受験後の感想を図8に示す。「役に立ったか否か」に関しては大多数が「役立った」と回答している。テスト実施への満足具合については、「定期的の実施して欲しい」「フルで実施して欲しい」という要望が目を引いた。

4.3 Pre-TOEICとプレイズメントテストとTOEIC-IPとの結果

TOEIC-IPはほぼ全ての新生が受験しているが、Pre-TOEICとプレイズメントテストは、デジタル表現技術者養成プログラム⁽¹¹⁾や環境キャリア教育プログラム⁽¹²⁾の学生のみが受験している。そのため、サンプル数は少ないが、参考に2013年度の3つのテストの相関を調べたものを図9に示す。TOEIC-IPはかなりの信頼度が保たれて

いると思われるので、これに対するPre-TOEICとプレイスメントテスト（60点満点）の相関を調べた。TOEIC-IPとプレイスメントの相関係数は $R = 0.678$ 、TOEIC-IPとPre-TOEIC（90点満点）の相関係数は $R = 0.697$ である。一般に、寄与率 R^2 が $0.4 \leq R^2 \leq 0.7$ は「相関あり」であるので、結果としてかなりの相関があることがわかる。Pre-TOEICもプレイスメントテストも信頼できるものであるので、本学の多くの学生に受験させ、英語教育の改善に利用していただきたい。

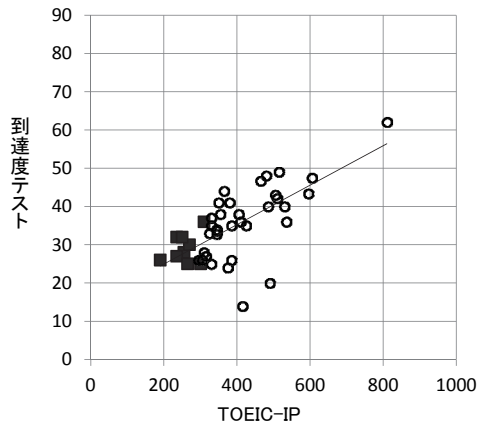


図10 到達度テストとTOEIC-IP

5. 到達度テストとPDCAサイクルの利用

本研究では、入学後プレイスメントテストを受け、その結果（成績）に応じて自学学習を行い、その後到達度テストを受けて、英語能力を確実に向上させる仕組みを構築しようとしている。図10は、e-TOEICで自学学習した学生のTOEIC-IPと到達度テストの結果である。サンプル数は非常に少ないのは、対象学生が入学後プレイスメントテストを受け、TOEIC-IPを受験し、英語Bの初級コースに割り振られ、e-TOEICでの勉強を余儀なくされ、さらに到達度テスト(90点満点)を受験した学生であるためである。■がe-TOEICで自学学習した学生、○がe-TOEICで自学学習していない学生であるが、その差はほとんど見られない。学生の英語能力を向上させるためには、e-TOEICの内容と学習時間の確保をもっと多くする仕掛けが必要であろう。

特に語学の勉強は、図11に示すようにPDCAサイクルを活用すべきである。まず、プレイスメントテストやTOEIC-IP等の結

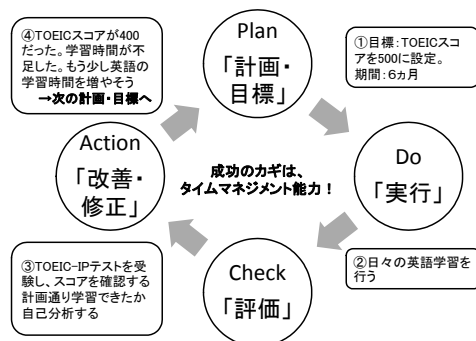


図11 PDCAサイクルを活用した学習

果により、①目標：TOEICスコアを設定する。期間も決める。そして、②日々の英語学習を行う。③TOEIC-IPテストを受験し、スコアを確認し、計画通り学習できたか自己分析する。④もし、TOEICスコアが400だったら、学習時間が不足したと思うなら、もう少し英語の学習時間を増やす。到達できていたら、次の目標へ向かう。このようなPDCAサイクルを常に意識させるのが教育の基本であろう。グローバル社会で十分にコミュニケーション力を活かすためには、教養教育や専門教育で学習する、あらゆる

知識、スキル及び行動力が必要である。英語能力はグローバルに活動するための十分条件ではないが、必要条件であり不可欠である。

6. まとめ

学生の英語能力を向上させるためには、彼らの自主性のみに任せるのではなく、大学側がeラーニング等を活用しシステムティックに学習させる環境を提供し、学生にタイムマネジメント能力を身につけさせ学習時間を確保する必要がある。本研究では、eラーニングシステムを活用して、本学の学生の英語能力を向上させるための試みを行って次のような知見を得た。

- ・入学時のプレテスト及び到達度テストで、学生の英語能力を無料で測定できるシステムを構築した。
- ・学生に英語能力に応じた自学学習用のeラーニングサイトを整備した。
- ・英語教材をeラーニング化しても、学習を強制して教員以外が支援すれば、学生は十分に学習できることを確認した。
- ・しかし、TOEIC-IPで英語能力の低い学生（スコア300以下）を、TOEIC-IPでスコアを350～400に上げるためには、約20時間程度、授業外時間を設けて少し強制させて自学学習させただけでは、効果は少ない。学習時間を強制的にもっと多くの時間、例えば50時間程度確保させる必要があることが明確になった。
- ・TOEICに準拠した教材をeラーニング化して、自学学習だけでも、また反転授業として自学学習と大学授業でも利用できる教材を開発した。

本研究の成果の基に、全学的に学生が英語の学習時間を十分に確保し、英語能力を向上させ、卒業後グローバル社会で十分にコミュニケーション力を活かして、満足できる仕事をすることを期待したい。

謝辞

Pre-TOEICの問題作成でお世話になった、本学全学教育機構英語教員のフェルナー氏、メイヤホフ氏及びeラーニングスタジオスタッフの皆様にご挨拶いたします。また、本教育実践研究を行うに当たりお世話になった佐賀大学全学教育機構英語能力試験実施委員会の委員の皆様、大学間連携共同教育推進事業の英語ワーキンググループの皆様にご挨拶いたします。個票作成は大学間連携共同教育推進事業の事務局である千歳科学技術大学の皆様の多大なる努力に感謝いたします。また、英語教材素材をご提供いただいたマクミランランゲージハウスの小野春夫氏に感謝いたします。なお、本研究の一部は、平成24年度文部科学省の大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」の補助金、及び平成26年度科学研究費補助金（基盤研究(B)一般）の補助により行ったことを記す。

参考文献

- (1) 藤井俊子, 早瀬博範, 草場 千穂子, 齋藤 夕希子, 穂屋下 茂: eラーニングを用いた英語教育における音声提出課題の効果, リメディアル教育研究, 日本リメディアル教育学会, 4-2 (2009-9), 55-62.
- (2) 藤井俊子, 早瀬博範, 古賀崇朗, 河道 威,

- 穂屋下 茂：佐賀大学における英語教育でのLMS活用，全学教育機構紀要，佐賀大学全学教育機構，創刊号（2013-7），3-12.
- (3) 早瀬博範・樋渡真理子・Mitchell, Zonia：Reading Preparation Course for the TOEIC Test，英宝社（2002）.
- (4) 佐賀大学全学統一英語能力テスト結果：
<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/toeic.html>
 （2015/1/23アクセス）
- (5) 留学支援英語教育カリキュラム：平成26年度「全学教育機構履修の手引き」の18ページ：
http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/tebiki_kyoyo_h26.pdf（2015/1/23アクセス）
- (6) TOEIC公式HP <http://www.toeic.or.jp/>
 （2015/01/23アクセス）
- (7) 平成24年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」：
<http://daigakukan-renkei.jp/b011/>（2015/1/23アクセス）
- (8) ALC NetAcademy2：<https://www.alc-education.co.jp/academic/net/course.html>
 （2015/1/23アクセス）
- (9) Moodle：<https://moodle.org/course/view.php?id=14>（2015/1/23アクセス）
- (10) 英文読解への多角的アプローチ[改訂新版] PRISMシリーズ(マクミラン ランゲージハウス)：<http://www.mlh.co.jp/catalog/product.php?id=763>（2015/1/23アクセス）
- (11) デジタル表現技術者養成プログラム：
<http://net.pd.saga-u.ac.jp/digi-pre/>
- (12) 環境キャリア教育プログラム：
<http://net.pd.saga-u.ac.jp/kankyo-ed/>
 （2015/1/23アクセス）

【付録】平成24年度文部科学省の大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」の概略
 代表校：千歳科学技術大学
 連携校：山梨大学、愛媛大学、佐賀大学、北星学園大学、創価大学、愛知大学、桜の聖母短期大学
 連携機関：日本リメディアル教育学会、大学eラーニング協議会、日本情報科教育学会
 事業概要：学士力における質保証に課題意識を持つ国立・私立、理系・文系、学部・短大の8大学と学協会が連携し、学士力に関わる共通基盤的な教育要素（教材・モデルシラバス・到達度テスト）を、クラウド上の共通基盤システム上に共有する。その上で、①各大学の入学段階の学生の学習や学習観特性を把握・共有し、各大学で実施すべき初年次系の学修支援プログラムや②社会の要請に呼応した共通の到達度テストに基づく弱点箇所をeラーニングで主体的に学ぶキャリア系の共通の学修支援プログラムを実施する。③大学間のFD・SDを通じて各大学の特色ある教育方法も共有しながら質の高い教育プログラムを展開して、基盤的な知識・技能を上手に活用して自ら問題の解決にあたる自律型人材の育成を目指す。さらに、一連の取り組みを学協会と協働して、他大学や地域社会で活用できる汎用性の高い学習内容や方法を構築し、ユニバーサル時代の日本の高等教育の質向上へ寄与する。具体的な例としては、基礎科目としては日本語、英語、数学、情報のリメディアル教材とキャリア教材の充実を図り、入学時にプレースメントテストで弱い領域を知り、eラーニング教材で自学学習し、その後、到達度テストで学力を測定して、大学で十分に学べる力を担保することを目指している。なお、プレースメントテストや到達度テストは、オンライン方式もしくは教室でマークシート方式の受験方法が選択できる。